

瀬里廣明著 『文明批評家としての露伴』

山田, 輝彦
福岡教育大学教授

<https://doi.org/10.15017/12177>

出版情報 : 語文研究. 33, pp.51-53, 1972-05-31. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

瀬里広明著

『文明批評家としての露伴』

山田 輝彦

二十数年、著者の日常は露伴に明け、露伴に暮れたようだ。著者の露伴への傾倒は、研究などというなまやさしいものではない。後記にも書かれているように、全集本は高価でもとも入手しなかったので、「無謀にも露伴全集の筆写を始めた」というのである。故柳田泉氏は、著者のこの傾倒ぶりを「露伴行」と称して讃嘆された由を聞いている。今ここに、そういう苦闘が窺ったのである。めでたしという言葉を惜しまぬ所以である。

本書は書名となった中心論文「文明批評家としての露伴」をはじめ、「幸田露伴と神仙道」「露伴の名人ものと禪」「露伴における愛について」の四つの論文から成っている。かつて、「座談会・明治文学史」において、柳田泉氏は、露伴の出現の背後に、大きな国粹主義の波、東洋思想の波をみとめて、哲学界における三宅雪嶺の位置と相似た点をあげた。違うところは、雪嶺が自分の理想をどんだん大きな哲学の本にしたのに、露伴は書かれざる文学として、頭に残して死んでしまった。「その点で露伴研究ということには、この書いた文学と、それから書かれない文学というものを、やっぱり分けて考えて、露伴の場

合には、書かれない文学というようなもの、理想として彼が生きた文学、どういふものが彼の頭の中にあつたかというふうな点が、かなり力を入れて調べられる必要があるのじやないかと思われる」と述べている。いわば、文学としては遂に造型化されなかつた彪大な地下鉱脈のようなものを掘り起す作業の必要を述べているのであつて、この書はその要請に真正面から答えたものであり、未踏の領域に打ちこまれた貴重な鉄鉱だといふことができよう。

論文の表題からも察せられるように、ここでテーマになつてゐるものは「文明批評」であり、「神仙道」であり「禪」であり「愛」である。その意味で「国文学」という専門領域にキツチリおさまる「研究」ではない。むしろ、灼熱した問題意識が前面に押し出されていて、その解答に露伴が呼び出されるといった形の「思想」の書物であるといつた方がふさわしい。例えば「文明批評家としての露伴」の冒頭には、牧歌的自然を容赦なく蝕んでゆく産業公害の問題がでてくる。走る凶器としての自動車の氾濫がでてくる。そして、学問の根源がとわれた大学

紛争がでてくる。公害、車、大学という、当世三題嚙のようでもあるが、著者の心底には、この何とも非人間的な疎外状況への憤りがたぎっている。こういう熱い現代の状況の中に露伴を置いた時、露伴の予言的な文明批判力の冴えは見事である。

公害の予言はすでに「河水」（大正十四年）の中にある。車の害の予言はすでに「道路」（大正九年）の中にある。「俗をして敦からしめ、風をして美ならしむる所以を思はずば、道路は砥の如く平らかに、自動車は箭の如く奔るとも、泉に就いて飲み、林に入りて食ふの史前の福も、亦復得るに由無からむ」というように。そして大学紛争の生んだ専門バカという言葉の先取りを露伴の「専門家崇拜」（大正五年）によみとるのである。

「すべて専門家といふものの言は部分的にだけ価値があるので、其の部分的といふことを忘れて価値づけたなら、それは大間違である」といい、専門家に対して「統一家」「総体の所有者」「心眼の力の強い人」を置くと、それはおのずから露伴の「知識人論」になっていると著者はとく。これらのいくつかの例から、著者の露伴への姿勢をよみとることができるのである。

しかば、露伴のこのような文明批評の基準は何によつて来たか。著者宛の柳田泉氏の私信には「大体として儒から仏に入り、仏から仙にぬけ、仙からまた仏にもどり、儒にもどつて露伴宗を大成した観がありますね」とあつて、露伴の思想の根底をさぐる鋭いヒントになる。それは当然人間と自然を分離してゆく技術文明とは逆の方向を持っている。著者はいう。「私は露伴を予言者などといつて持ちあげたりしようとするものではないが、彼は物質文明の行きつくところがどうなるかを達人

的に洞察していたのである。「生活を豊富にするといふことは恐ろしい誤解を生じ得る傾がある。今の世、生活を豊富にせんとして、好んで易ならず簡ならざるを致し、而して大難の險にあひ、小難の阻にあひ、艱難煩乱して苦悶憂悩するもの少からざるを見る。生活の豊富はむしろ易簡の中に存して、夫の紛然雜然たるものの中には存して居まい」の露伴の言は「修省論」が書かれた大正初期より、GNP世界第三位を誇る現代日本についていったものとしてよくあつていたのである。そしてこの簡易の道にそむく生を現出した原因が、技術文明の反自然的性格にあることを思うとき、露伴の文明批判の原点の一つが「自然」であることは容易に了解されるであろう。著者が露伴の晩年の著「仙書參同契」の末尾の宗教にふれた部分「いづれも有限の人間の生命の中に無限の生命を体得した大讃嘆が其根基となり源泉となつてゐること」を引用して、「露伴の文明批評の根本」と断じているのは当然である。

紙数の関係で主論文のみに絞らねばならないが、全体の半分を占める「文明批評家としての露伴」は、いわば思想家露伴序説ともいふべきもので、田辺元、西田幾太郎、鈴木大拙、ハイデッガー、サルトル、トインビー等々からおびただしい引用がなされている。著者の現代思想追尋の熱意のさせる業であろうが、例えば「簡易」尊重の思想が、易経から来ていることを述べた後で、それが直ちに中国の文化大革命の思想と結びつけられてゆくような性急さは、今少しの抑制と客観化が必要ではないかと思われる。

しかし、さすがに露伴への傾倒が深かっただけに、随所に独

創的なひらめきが見られる。例えば露伴の「形式」といわれる連環体についてである。連環体という命名は、「風流微塵蔵」についての柳田泉氏の評から出たものであるが、これに注目したのは伊藤整であった。彼はその著「文学入門」において、「源氏物語」や「好色一代男」のような、従来の日本の小説構造を日本的並列形式と名づけ、ヨーロッパのそれをオーケストラ形式と名づけた。そして、並列形式を、もっと緊密な連絡のある物語構造にしてゆく過渡的な構造として、露伴の連環体を高く評価した。そして、「風流微塵蔵」を、「一群の人間を使って、いくつかのエピソードを、単独でなく、それぞれが、鎖の環のようにつぎのエピソードとつながる形で書いてゆきながら、全体として長い鎖のような物語たらしめようとした作品」と規定した。「運命」や「連環記」にこの形式が用いられているのは周知の通りである。しかし、伊藤はなぜ露伴が連環体という全く独自の形式を創出したかを説明していない。著者は連環体を生み出した根源のものが仏教思想だと主張する。「蝸牛庵聯話」についての解説がそれである。著者はいう。

〔仏教的にいえば因縁の糸をたぐって話を次から次へとつづけて行くもので、これを全体的に見ると、一つ一つの鎖の輪が因縁によって連環している状態となるのである。その連環の妙趣は華嚴教の相依相関の思想で味わえるものであり、露伴が人間存在や世界を把握するのに華嚴的思索をしていたことを証明するものである。(中略)露伴の「運命」や「連環記」などを讀むと、一即多、多即一の華嚴的世界観が、いかに微妙に表現されているかに気づくのである〕

こうして、「風流仏」に法華を、「二日物語」に密教を、「一口劍」に禪を、「連環記」に華嚴を見てゆく視点は全く新鮮である。こういう部分を、実証的に深め、体系づけることが、これからの著者の第二段階の仕事となるであろうと期待される。的にはずれた妄評についてはおゆるしを乞う次第である。

(昭和四十六年九月二十五日 未来社発行)